



TITLE:

# 戦略的活動アーカイブを起点とするURA活動の高次元化

AUTHOR(S):

田上, 款; 大西, 将徳; 岡崎, 麻紀子; 鈴木, 紀子; 森脇, 一匡; 関, 二郎

---

CITATION:

田上, 款 ...[et al]. 戦略的活動アーカイブを起点とするURA活動の高次元化. 2019: P1-1.

ISSUE DATE:

2019-09-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/244474>

RIGHT:



# 戦略的活動アーカイブを起点とするURA活動の高次元化

田上 款、大西 将徳、岡崎 麻紀子、鈴木 紀子、森脇 一匡、関 二郎  
(京都大学 学術研究支援室)

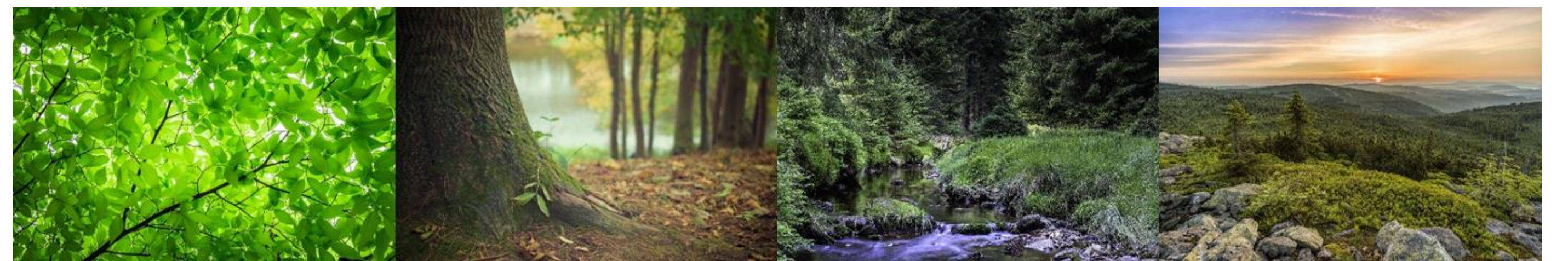
## 要旨

URA組織の拡大と機能の複雑化は、URAの活動幅を広げる一方、活動全体像の把握を難しくしている。その結果、個々の活動は点として孤立し、活動を俯瞰する網羅的視点に立った活動戦略の提案が実現されていない。これらの課題解決には、活動戦略の立案を見据えた戦略的なURA活動のアーカイブが必要となる。

京都大学学術研究支援室（KURA）では、上記の視点に基づき研究者とURAのコンタクト情報の網羅的収集に取り組んできた。統一基盤を用いた情報の蓄積は、URA間の情報共有を密にし、組織の活動概況の把握に貢献している。今後は、蓄積した情報をもとに個々の活動の連関性を理解することが課題となり、URA活動を点ではなく線や面として捉えるツールとして本手法を深化させる必要がある。本発表では、これらの事例と共に、URAを研究力強化の基盤機能に押し上げる手段として戦略的活動アーカイブを捉え、その手法と意義を議論する。

## 背景と目的

URAは「木も見て森も見なくてははいけない」



- ・研究力強化には研究者(木)、大学・学術(森)の両方の動向を把握する必要
- ・全学の研究者とURAのつながりを一望できる基盤を作りたい
- ・研究者へのコンタクトや支援情報を蓄積、URA活動の定量化を試みたい
- ・URAの経時的な活動を点ではなく線や面として見える化

URA活動の高次元化

## URAの活動アーカイブをテーマにセッションを開催します!!

A-4:戦略的活動アーカイブを起点とする  
URA活動の高次元化

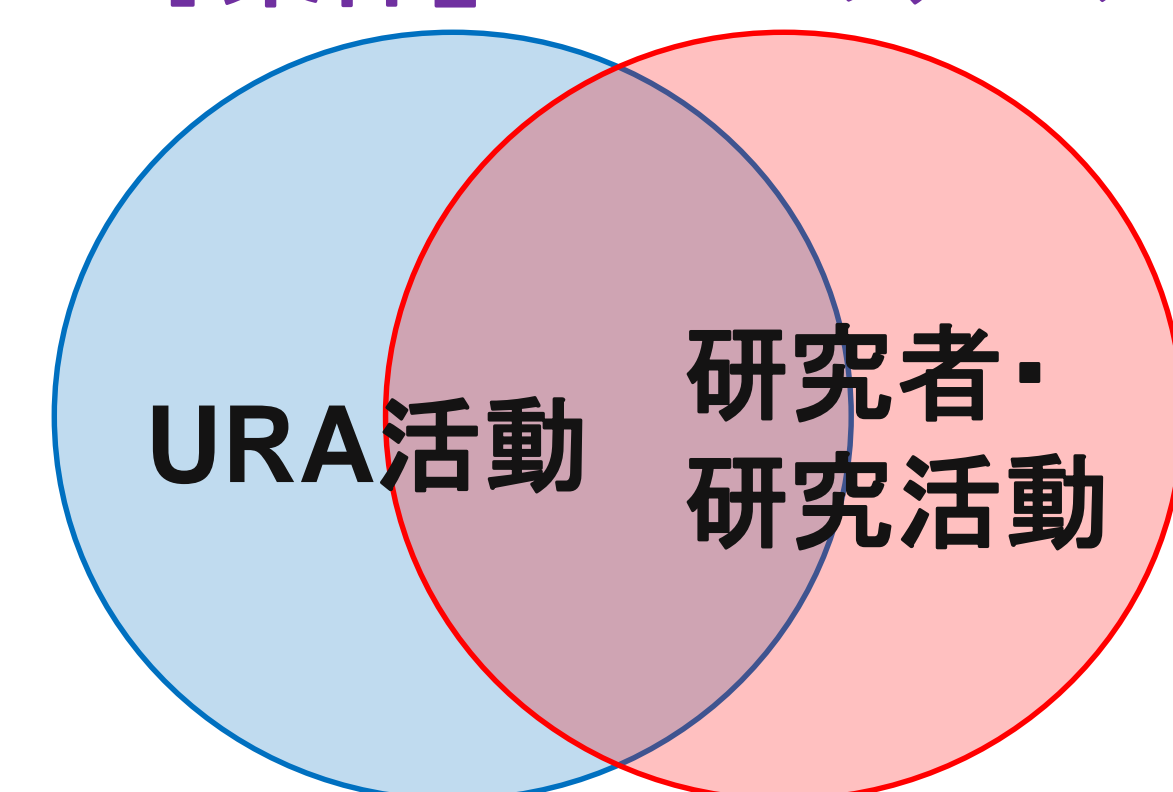
日時：2日目 (9/4)・ 9:00 – 10:30

会場：2階・B202

大学内のURA活動アーカイブの方法、目的、活用、  
URA機能の高度化、高次元化に興味ある方！  
是非、一緒に議論しましょう！！

大阪大学  
URA活動を起点の  
アーカイブ  
(URA活動カルテ)

茨城大学  
研究者とURAの接点  
『案件』ベースのアーカイブ



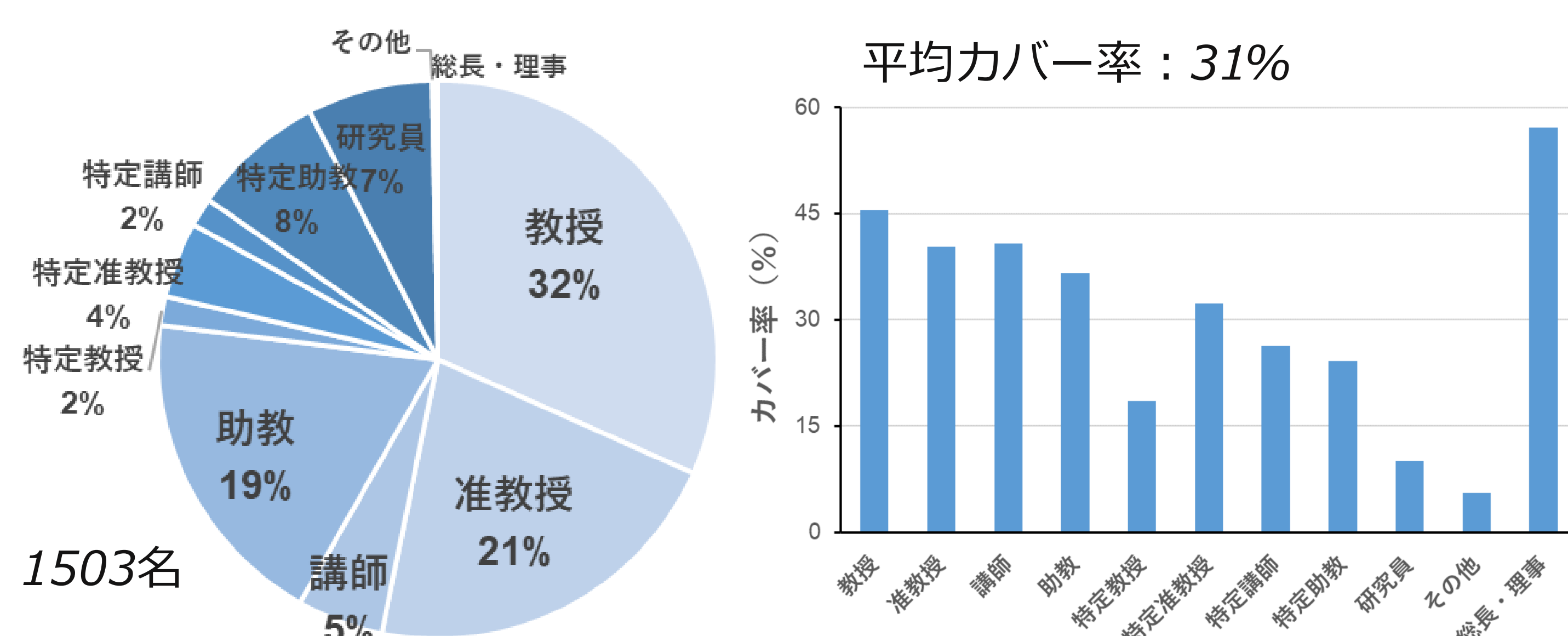
熊本大学  
研究者DBを基盤  
としたアーカイブ  
(研究者カルテ)

京都大学  
研究者とURAの接点  
『コンタクト』ベースのアーカイブ

## コンタクト情報の定量化

- ・研究者と全URA (約40名) とのコンタクト情報を記録
- ・研究者名、職位など最小限の情報を共通シートに入力
- ・2018年度より入力4600件、コンタクト研究者1500名

◇ コンタクトの職位別割合 ◇ 職位別カバー率



- ・活動の俯瞰だけではなく、活動指針の策定に活用
- ・研究者の名寄せや、データ粒度の統一性に課題

## コンタクト情報の検索

- ・コンタクト履歴の検索機能を実装  
⇒ 研究者毎の過去の支援履歴の抽出が可能  
⇒ 研究者名だけではなく案件別の検索も可能

◇ 検索画面のイメージ

氏名	DBリンク								
名無権平	<a href="https://researcher.kura.koto.ac.jp/s/abcd/2yfx">https://researcher.kura.koto.ac.jp/s/abcd/2yfx</a>								
所属	職位	現 or 退							
工学研究科	教授								
日付	5. カテゴリー	6. 主要事項	7. 備考	チーム	担当	担当	担当	担当	
2018/10/15	Pre	2019年度科研費BU	基盤A	桂	大西	田上			
2019/4/17	Pre	科研費・基盤S模擬ヒアリング	基盤S模擬ヒアリング	桂	岡崎	田上	大西		
2019/5/20	産学連携	A社研究担当との面談	基盤S模擬ヒアリング	産連	AA	BB	CC		
2019/6/10	国際	〇〇国際シンポジウム	セッション関連相談	国際	DD	EE			
2019/7/4	URAシステム	研究科執行部報告顔合わせ	定期面談	桂	田上	大西	菅井		

- ・支援履歴に加え研究者DBのURLも表示  
⇒ URAコンタクトと研究者DBのリンクを一部実現
- ・システムの軽量化が課題